研究ノート ニダバ (*Nidaba*) 31(2002), 126-135

言語学におけるX-centricismの問題

― 日本語を観る日本人の感性が世界を救う ―

田原　薫

0．はじめに

本稿は前号に寄稿した「新世紀に嘱望する言語学の若干の問題」と同じく、後進の同学が興味を抱いて追求して下さる可能性を淡く期待する、miscellaneous な**随筆**であるが、今回は比較的統一されたテーマというか、一つの基調低音をもっている。そこで一応「**研究ノート**」として発表させて頂くが、内容は音声学から統語論・意味論などに亘っており、一部門だけに専門化した研究者が全テーマを深化発展させることは困難であろう。そのためには「田原学派？」でも作って、お弟子さんたち？に手分けして各分野を研究して頂くのが理想的であるが、それも叶わない以上、なるべく面白く書いて一般の興味を刺激させて頂くしかない。手始めに“X-centricism ”から解題することにする。

“X-centricism ”というのは「何々中心主義」ということであり、世界にあっては英語中心主義、日本にあっては東京（語）中心主義などを指すのであるが、筆者が齢を取って「右翼的」になったせいか、最近その弊害が目に余るようになってきた。いや、私は何も、何かを中心に据えることが悪だと言っているのではない。「中心」さえあれば全体のことはすべてわかる（から、結局中心さえ残せばよい）というような、たとえばチョムスキーのように、英語さえ解明すれば言語のことはすべてわかる、というような態度が、政治的な“Pax Anglo-Americana ”を擁護し、他の民族・国民を侮辱し、苦しめることに我慢できない、また我慢すべきでない、と言っているのである。同じことは日本国内における東京語中心主義についても当てはまる。【結局、今回は３題噺となった。】

1．再び句構造文法の限界について

1957年に *Syntactic Structures* が発表されて以来、45年にわたってチョムスキーは世界のカリスマ的言語学者と目され、20世紀に残した（或いは**遺した**）業績の呆れるほどの貧困さにも拘らず、華々しい名声をかち得てきたが、このことには幸運な偶然がいくつか働いていると思われる。

そんな偶然の第１に挙げるべきは、彼が米国内で"minority"と呼ばれる集団群の中で最有力な集団の出身であること、つまりいわゆる「ユダヤ人」である、ということである。

「ユダヤ人」というのは人種や民族といった概念では括れない不思議な概念であって、端的に言えばユダヤ教徒ということであるが、たとえ本人は勿論、親の代、祖父の代にキリスト教に改宗しても、その出自についての（周囲の社会の）記憶が消えないうちは、「ユダヤ人」として差別ないし注目（或る場合には尊敬）されるのである。それは古い歴史に根差したものであって、もともと（Chomsky 或いはChomski (ﾎﾑｽｷ)家のような）ポーランド系、さらにはドイツ系、ロシア系など（東・中欧）の「アシュケナージ」と一括されるユダヤ人は、キリスト教徒（十字軍）とイスラム教徒との激しい抗争が生み出したものである。つまり、どちら側からも敵として攻撃されないためには、そして商業に従事するには中立的なユダヤ教徒にならざるを得なかったが、その人々の子孫が「アシュケナージ」なのである。ヒトラーのいわゆるHolocaust の対象になったのはこの人たちである。

私は Noam Avram Chomsky 氏個人の内奥の宗教的信条を窺い知ることができないが、彼の個人名を命名したのは父親であろうから、(Noah Abraham とかでない）このような非キリスト教徒的な名前は、少なくとも父親の代まではユダヤ教徒であったことを推定させる。このような「アシュケナージ」には、米国に移住し、米国籍を取って立派な市民として暮らすことが唯一の世俗的救済ないし成功の道だと言ってよいであろうが、その思想や行動様式には一種の共通する特徴が見られる。それは「普遍主義」と「反相対主義」である。チョムスキーの学説や言論の中に普遍主義(universalism)と反相対主義(anti-relativism)を見て行く前に、同じくポーランド系アシュケナージであるZamenhofの作った人工国際語エスペラントの実体と思想を点検してみるのが面白い。

エスペラントの実体についてはここで触れる余裕がないが、それを支える思想の中で注目すべきは"homaranismo"(人類主義) ということである。これは「人類みな兄弟」というような思想であって、人は直接「人類」に属しているのがよく、各「国民国家」"nation state"の国民という思想はむしろ人を不幸にする、と考える。つまり、国家が戦争や差別などあらゆる形の不幸の原因となることを排除する一種の普遍主義である。しかし、ここまでは美しい建て前であって、エスペラントの実体は、結局合成された「標準平均欧州語」に他ならず、いくら文法を規則的にしても、概念化自体が欧米人に有利、その他の諸民族に不利なものであることは否定できない。結局「反相対主義」の産物なのである。

チョムスキーの思想もザメンホフの思想と通底するところがあり、彼が人間の言語能力を説明するために「人類生得の普遍文法（UG=Universal Grammar）」を仮定したのは、その名の如くuniversalismの発露と見なしてよい。しかし、形式面からそんなUGをモデル化しようとすれば、全世界に5000あると言われるすべての言語を平等に扱って帰納的にUGを抽出することはできないので、勢い学説作者の母語である英語をモデルにし、「英語で必要なことは何でも言えるから、**言語とは英語のようなものであろう**。従って英語を深く研究すれば言語のことはすべてわかる」という思い込みのもとに、英語風の句構造がUGの核心であろうと考える。これは結局、反相対主義の行為である。

さて、以上のように一見対立する概念である「普遍主義」と「反相対主義」とが同じ現象の表と裏としてしばしば密着しているのであるが、厄介なのは「反相対主義」が建て前上「普遍主義」の美服を着て主張されると、それは理念建国国家であるアメリカ国内で強く支持されるし、政治上の情勢からして日・欧などからは反対し難いという事情がある。殊に、ナチスドイツほど極端でなくとも長い歴史の中で積み重ねたユダヤ人差別に対する罪の感情が欧(米)州諸国にはあるから、アメリカ国籍のユダヤ人が一見「普遍主義」的な言論や学説を発表すると、それは「水戸黄門ドラマの葵の印籠」であり、違う意見を抱く者も平伏するしかない。少なくとも日本におけるチョムスキー受容には多分にこのような事情が働いたと思われる。だが、はたして言語とは英語のようなものであろうか。

英語はおなじみのようにＳＶＯの語順を頑固に保持する、主格－対格型の格組織をもつconfigurational language「構造式型の言語」とされている。とりわけＳＶＯ語順の堅持の傾向は周辺のどの欧州語よりも強く、疑問文や不定詞を含む構文でも“Do you speak German?/Can you speak German? ”のように言い、“Sprechen Sie deutsch?/Können Sie deutsch sprechen?”のようには言わない。後者では助動詞を除く命題核心部の語順はそれぞれＶＳＯ／ＳＯＶであるのに対し、英語ではいずれもＳＶＯである。また、英語では格の現象は殆ど消滅に近く、痕跡的に人称代名詞に残るのみ。そして（主語と定動詞の）一致の現象も三人称単数現在を残すのみで、いわゆる「孤立語」に接近している。

少なくとも英語の実名詞では主格と目的格の区別はなく、有生名詞の所有格を除けば唯一の「通格」の形しかないから、能動者と受動者という意味上の区別を信号するためにはＳＶＯの語順に頼らざるを得ないのであるが【或いはそこに［Ｓ［ＶＯ］］という階層構造が内在していると見なすか】、そんな言語（モデル）からは、ロシア語やチェコ語のような活用格のしっかりした言語や、トルコ語や日本語のように膠着格のしっかりした言語の格現象のことは何もわからないのである。そもそも「格」というのは語順の変化に遭遇しても名詞の資格の同一性を保障するために発達した言語装置であって、だからこそ《センバ山には狸がおってさ、それを猟師が鉄砲で撃ってさ》（ＯＳＶ語順）と言えるのである。「語順格」などという概念は滑稽な矛盾であるが、では［Ｓ［ＶＯ］］に頼る「構造格」はどうか、というと、最初から動詞の「一致」を具えた語彙準備から出発して組み上げていく文法観では、「一致」によってむしろ［ＳＶ］の結束の方が強く感じられるから、階層づけは［［ＳＶ］Ｏ］となる筈であり、かつて私が試みたＳＯＯＴｈ２のように、主語の方が目的語よりも低い（＝より内奥の）構造に生起したと見なす方が実際的な説明力が高かったりするので、チョムスキー派の［Ｓ［ＶＯ］］基底説も疑わしい。

結局、英語や中国語のような言語を規範として採用すると、少なくとも能動者と受動者の区別のためには、人間の言語は格というものをもつ必要がない、階層構造さえあればよい、という結論が出るのであるが、それではなぜ現実の言語が形態的な格をもっているのか、とりわけ「能格（・絶対格）型」の格組織を取る言語が存在するか、などということ

にはまったく答えられないのである。それらの言語の格変化や格組織は、神が与え給うたシンプルな言語能力から逸脱した無用な複雑化であり、悪魔の誘惑に乗った「ひねくれ」だ、と「普遍主義者」は思うであろうが、それこそが「反相対主義」なのである。実は、英語の発達史でもかつてあった格変化がだんだん摩滅して現代英語になっている。

言語にとって最低限必要なものだけをつきつめていっても、諸言語の多様性は説明できないが、或る意味では英語や中国語のような無格（に近い）言語は、多くの言語が引き寄せられて陥って行くブラックホールだとも言える【ロマンス諸語やゲルマン諸語の歴史を見てもそれが言える】。しかし、日本の幼児が日本語を習得していく過程などを考慮すると、ブラックホールから外界への進出・発展も起こり得るのであり、チョムスキーのようにブラックホールに安住していては外界のことは何もわからないし、それを「言語普遍」として容認することはできないのである。

結論として、言語学は「言語普遍」を体現するモデルとして、格の現象をしっかりもつ言語を選ばなければならないし、できれば性・数・格の一致現象なども「意義をもって存在するもの」として扱わねばならない。もちろん階層つき句構造もそれなりの意義をもつが、言語のあらゆる局面をその概念だけで割り切ってはならないということであり、当然、それを遺伝的ＵＧと見なして人間の言語能力全般を説明してはならないのである。

２．ラネカーの認知文法に見る英語中心主義

Ronald W. Langacker も「認知文法」"Cognitive Grammar" の提唱者として一時期脚光を浴びた学者であり、一時はチョムスキー（派）を凌ぐ勢いで日本の学界に受け入れられ、学会などでもその路線の研究がよく発表されたりしたものであるが、最近では一時の勢いを失っている。その理由を考えてみると、彼が、人間の営む認知(cognition) を直接（彼の母語である）英語に結びつけて説明し（ようとし）たことであろう。私（に限らず穏健な理性で言語を眺めようとする人）なら、言語は直接認知を表出するものだ、とは思わず、幾多の認知の経験から集約し・比較し・パターン化された「認識」(recognition) を表わすものだ、と考えるであろう。とりわけ、聞き手の側が話し手の話を聞いて理解するのは、決して話し手がテレパシーによって現に感受している直接経験（知覚／認知）を聞き手の脳に注ぎ込んでいるのではなく、言語によって話し手と聞き手が共有している「認識」を、聞き手が聴取によって活性化されたことによるのである。認識の形成には当然、話し手と聞き手が所属する文化や言語の個性が働くから、英語母語人とフランス語母語人とでは、英語母語人と日本語母語人との相違ほどでなくとも、やはり認識の体系には相違がある。英語だけが認知を忠実に再現しているなどと言う傲慢は許されないのであるが、ラネカー[1995]の「繰り上げ論」などを読むと、そういう印象を禁じ得ないのである。

彼は文の主語・目的語に相当する認知的成分としてそれぞれ"trajector", "landmark"という概念を設定する。そしてそれらは「被描写シーン」においてthe primary prominent

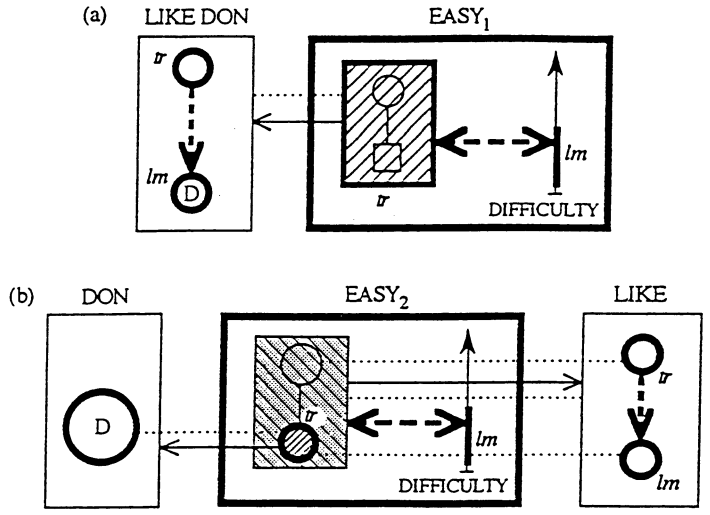
figure, the secondary prominent figureである、という。では、どうしてそれらがそのような認知的（意識的）地位を占めていると言えるのか、脳波の測定とか何かの手段で検証する方法があるのか、と反問されると、それはないから、結局「それが主語／目的語になっているから」と言わざるを得ず、循環論法に陥ってしまう。それはさておき、彼は別の項目の説明で、物、とりわけ人物はprominent figureになり易いと言っているので、たとえば英語の使役構文で'I make Paul eat the cakes.'のように被使役者 Paul が make のlandmarkになっているのは当然のことと見なす。

しかし、実はこれではフランス語の対応する文を説明できないのである。フランス語で対応する文は'Je fais manger les gâteaux à Paul.'と言うから、被使役者 Paul は目的語でなく、斜格（表面上は与格）の項として現れる。対格で現れたのはむしろ無生物たる菓子les gâteaux である。一体 Paul はlandmarkなのか、でなければ何なのか、説明に困るであろう。フランス人の認知が英語母語人の認知とそう異なるとは思えないのに…。

さらに、ここでこのシーンにおける動的エネルギーの流れを見てみよう。「私」から発したエネルギーはポールに伝わり、ポールが発したエネルギーは菓子に伝わるから、英語の文はenergy flow を iconically(肖像的) に表現していると言える【これがラネカーの自慢の一つ】が、フランス語の語順は「私」から菓子に飛び、ポールに逆行する形になっていて、energy flow に対してiconicでない。だから'Anglo-centricism'に立脚するラネカーは、暗黙のうちに「フランス語はひねくれている」と主張していることになる。さらに日本語ともなれば逸脱はもっと大きく、energy path である動詞を target である目的語より後に置いている…と。こんな見方を日本人は許すわけにいかないのである。言語の表現するものは直接的な認知ではなく認識(recognition) であり、良い文法はcognitive grammar でなく'recognitive grammar'=認識文法であるべきであって、それぞれの言語で認識の通達に立派に役だっていれば、energy flow のiconicity など小さな問題であり、偶然英語がそれに一致したからといって、鬼の首を取ったように言うべきでない。

ラネカーはまた、古典的な変形文法でＯＳＲ(Object-to-Subject Raising) として知られた、"Don is easy to like."のような難易文を[1995]で論じている。「ドンは人好きがする」という意味であるが、このように like のような心理動詞を動詞成分としてもつ文は最も難易文にふさわしくない例であって、典型的な例なら"Don is easy to kill."「ドンなら楽に殺せる」（物騒な例で失礼！）などを論じるべきである。 kill のような業績動詞は最も他動性の高い他動詞であって、patient に回復不能の変化をもたらすが、like のような心理動詞は、好感の対象には何の変化ももたらさず、むしろ好感の抱き手の方に心理的変化（快感なり片思いの苦しみなり）をもたらす。ラネカーは原論文のFUGURE 13.として、ドンを好く一般人の方をtrajector、好かれるDon の方をlandmarkとして図式化しているけれど、実はそれは直接認知の結果ではなく、現代英語における認識（化）の構造を示すにすぎないのである。その証拠に古英語でのcounterpart を後で調べてみる。

FIGURE 13.



図で(a) の方は To like Don is easy. に対応する図式であり、(b) の方はＯＳＲが掛かった Don is easy to like. に対応する図式であるという。いずれにせよ$EASY_{1/2}$ のような述辞がlm(landmark)とされていることに違和感を感じるが、殊に(b) では to likeという情報が欠かせないので、むしろこれの方がlandmarkではないかという気がする。何はともあれLIKE DON/LIKE という箱の中の単純な丸（一般人を表わす）からＤ(Don) と記した丸に向かって破線の矢印が達しているが、ラネカーによればこれはmental contactを表わすという。つまり一般人が Donを好いていることになる。しかし、なぜ Donがtr (trajector) でないのか理解できない。だって最もprominent な成分といえば最初からDon ではないか。最初は動詞LIKEの**目的語**だったからsecondary prominent figureたる**landmark**に位置づけたのか。それなら彼は統語現象からprominenceを**逆算していた**ことになる。

さよう、実際古英語では I like Don. のような他動詞型の語法はなく、それに相当する文は Mê lîcaþ Don.「私にはドンが好ましい」のように言った。 mê は ic （私）の与格、Don は主格。lîcaþ (<lîcian) はDon に一致して３人称単数である。尤も Don<Donald などという人名は当時はなかったであろうから、「私はエドワードが好きだ」というのをMê lîcaþ Eadweard. と言ったのである。好感の対象は最初からtrajector だったのだ。

さて、長い英語の歴史の間に自動詞 lîcian は他動詞 like に変わった。それに応じて２つの項の格もそれぞれ変わったが、同じ事実に対する古英語人と現英語人のcognition が変わったとは信じられない。変わったのは認知をパターン化する認識(recognition) であり、統語法がそれを反映し、そのお陰でラネカーが図の箱の中に○から○Ｄへ向かう破線矢印を書いたことを一種のエネルギーの移動のように錯覚させることになった。しかし動詞 enchant/charm（魅惑／魅了する）の図式なら、同じ矢印でも吸引のエネルギーを表わすことになり、状態変化を経験するpatient は○の方であることがはっきりする。だがそれは like でも同じ筈。だからラネカーのtrとlmの決め方は実は**認識**に基づいている。

認識は概ね統語法に反映されるから、結局ラネカーの判断は統語法からの逆算にすぎない。ということは、言語（化）以前の純粋な「認知」だけを基盤として文法を主張することはできない、ということであり、「認知文法」は失敗という結論になる。それは予測性を欠き、せいぜい後講釈 afterthought か事後釈明 post-factum justificationである。

英語の難易文は他動詞構文とそれを支える認識パターンと密接に結びついたものであり、自動詞からは Don is easy to swim/laugh. のような文はできない。たとえ他動詞性が低い like や enchant のような二項動詞でもその目的語に限って難易文の主語になることができるのであるから、それはパターンの問題であり、それを背後から支えるのは現代英語なら現代英語という個別言語の話し手社会で形成・共有された「認識」である。それを人類全体が共有する「認知」であると主張するラネカーの傲慢は許されないのである。

3．東京語が日本を破壊する

日本語は世界№２の経済大国【怪しいものだ！今後はもっと怪しくなろう】の公用語であるにも拘らず、標準語というものが確立されていない。いや、現にあるじゃないか、と反論される向きもあろうが、現在教育や放送に用いられている言語は、東京語を概ね忠実になぞった「共通語」であって、地方人もそれを押しつけられているにすぎない。東京語が他の方言より優れた言語ならば問題はないが、必ずしもそうでないから困るのだ。以下で東京語の音声の特徴を①調音(articulation) と②アクセント の２つの側面から見ていき、日本の国益にそぐわないと思われる点を指摘したいと思う。

①調音篇：母音「ウ」と鼻濁音

★西日本の住民や出身者が東京或いは広く東日本の方言を聞いていて、最も耳に障る発音は母音「ウ」（およびそれを含む「ウ段」の音節／モーラ）であろう。明らかに「〇〇弁」として差別の対象となっている方言では母音「ウ」の発音の調音点が前寄りで、ロシア語のыに近く「イ」に接近して聞こえるが、東京語の「ウ」にもややその特徴が見られ、特に若い世代ではもう「ウ」を（後舌母音でなく）中舌母音に分類して差し支えないまでになっている。もちろん唇の丸めはないから、「イ段」「ウ段」それに「ュ段」の拗音が互いに区別し難い響きになっている。殊に「キ」「ク」「キュ」の聞き分けが難しい。また「リ」「ル」「リュ」の区別も同程度である。これは当然日本語の体系を揺るがすものである。「シュジュツ（手術）」という発音が難しいからといって、「シジュツ」「シュジツ」「シジツ」でも認めよう、とする（「良い話し方」の）先生があるようだが、東京人に対しては尤もな提案であっても、日本の「標準語」としては認めがたい。尤も、西日本の住民にとっても「シュジュツ」の発音は楽ではないが。

言語普遍を研究している学者の統計によれば、世界で最も普通な母音体系は５母音体系で、その際に取る音価は概ね (i) (e) (a) (o) (u) であるという。この最後の (u) は円唇後舌母音である。近畿・中国・四国・九州の各方言の「ウ」は、円唇性こそ顕著でないものの

【顕著すぎては困るのだ。日本語は短時間に沢山の短い音節を並べなければならない言語なので、いちいち口をすぼめていては早く喋れない。】、舌がよく後ろに引かれているので、〔o〕〔i〕など他の母音と明瞭に区別される深い音色をもっている。最近人気を集めているＪ(=Japan)Popsの'diva'（歌姫）たちのうち、**浜崎あゆみ**は福岡県出身、**Ｍｉｓｉａ**は長崎県対馬の出身、**ａｉｋｏ**は大阪府出身であるが、彼女らの母音「ウ」は歌の中（殊に、長く伸ばす場合は円唇の〔u〕）にあっても、トークの中にあっても変わらずきれいである。しかし東日本の出身者の場合概してトークでは東京的（平唇中舌）ыを使い、殊にラジオ・テレビのアナウンサーがそれを使うと嫌らしく響く。歌手が歌う際はさすがに唇を丸めて国際的な響きの〔u〕を出そうと努めるが、時には長い音符の最初の部分だけに〔u〕を使って、その後はыとして伸ばすことがある【演歌歌手ではしばしば最初からыだ！】。音色の美学を云々しようというのではない。とにかく「ウ」「イ」「ユ」が接近しては日本語に同音異義語が増え、通達効率が下がるので、東京風の（ыに近い）「ウ」は標準語から断じて追放しなければならない音声であると思う。日本人とりわけ西日本人はこのような音声面のTokyo-centricismに断乎抵抗すべきである。

★次は「ガ行鼻濁音」の問題について考えてみよう。固い発音〔ga〕etc.と軟らかい〔ŋa〕etc.の使い分けは複雑で、概して前者は文節頭、後者は語中や助詞「が」などに現れるが、「高等学校」「専門学校」の「ガ」は濁音であるのに対し、「小学校」「中学校」「大学」のそれは鼻濁音で発音すべきだという。このような規範は（とりわけＮＨＫの）アナウンサーに強制されるようであるが、むしろそれは害になっている。というのは、鼻濁音が一種の免罪符になっており、それさえできれば他の勤め、たとえばアクセントとか区切り方、prominenceの置き方などが無茶苦茶でも許されるような傾向があることである。

ともかく、鼻濁音は西日本では衰退の傾向にあり、中国方言や九州方言では夙に消滅し、近畿方言でも農村部や老年層に残るが都会の若い世代はもう使わない。脱鼻音化は地方に関係なく都会の若い話し手たちの間に、東京や東日本にも着実に浸透しつつある。しかし一方ではＮＨＫを始めとして発音の「美学」を振りかざし、絶滅危惧動植物の保護のように保存しようとする動きもまだ強い。発音の問題に「美学」を持ち出すのは禁じ手であって、「鼻濁音は美しい」などと言い張ることは、中国方言や九州方言は汚い、と言っている差別発言に等しいことに主張者は鈍感なようである。

鼻濁音が衰退しつつあるのは、実は通達効率に関係した当然の成り行きである。生成音韻論など、音韻をいくつかのdigital な指標に分解してそれらの束として見る方法論では捉えられないが、実は音響音声学的にはｍ／ｎ／ŋの識別性はｂ／ｄ／ｇの識別性よりも悪い。つまり鼻音相互の方が口音相互よりも聞き分け難いのである。それは、spectrogramを撮ってみると理由がはっきりする。口音ｂ／ｄ／ｇの周波数スペクトルでは、母音の第１ formantと第２ formantに相当する箇所に特有の帯が現れる。鼻音ｍ／ｎ／ŋの場合は、第２ formant相当箇所にそれぞれｂ／ｄ／ｇと共通な帯が現れるが、第１ formantが存在

すべき低周波域に鼻音共通の広い帯が現れて、第１ formant相当周波域を埋めつくしてしまう。従って、口音の組が二つのformantsで判定されるのに比べ、鼻音の組は一つの（第２formant 相当の）周波数で識別しなければならず、聞き手の負担はそれだけ大きい。鼻濁音「ŋ行」は「マ行」「ナ行」と、対応する口音をもつ行どうしよりも、聞き分け難いことになる。杉藤(すぎとう)美代子氏といえば音声学の碩学であるが、お話によれば、ご自分の名を名告るのに「ギ」を鼻濁音で発音する【これが同氏のnativeな発音】と、しばしば「え？スミトモさんですか？」と訊き返されたそうである。そこで「ギ」を普通の濁音に変えて言うようにしたら、間違えられる度合いが減ったそうである。

結論として、鼻濁音のような通達の阻害要因は１日も早く衰退すべきである。どうしても守りたいアナウンサー諸氏も、せめて外来語からは追放すべきである。私には"figure"という英語から来た「フィギュア」を鼻濁音を使って発音するアナウンサーの知性が疑われてならない。それはしばしば「フンニャー」と響き、時には「糞尿」と聞こえるのである。その醜さに鈍感であっては、国際化云々は前途遼遠であろう。

②アクセント篇：平板化と型の衰退、redundancyの不足など

最近では日本語のアクセントの平板化が目立つようになってきた。日本語とはいうもののそれは概ね東京語の現象である。どこかのモーラから下がる有核型から平板型すなわち最後まで下がらない無核型に変わる単語が増えてきているのである。殊に「情報化社会」の波に乗った外来語、たとえば「メール」とか「ドット」とかが、もとの外国語を知っている者には当然期待される（明解国語辞典の方式で）①型でなく、◎型で発音されるのが耳につく。これが単に散発的に起こっている間は日本語は大きく崩れないで済むが、◎型が「かっこいい」というような価値観と結びつくと、日本語のアクセント体系は急激に崩壊する恐れがあり、警戒を怠れないところである。

東京語における平板化進展の理由を考えてみると、まず第１の理由は、東京が東京式アクセント地域の最前線に位置していて、北に茨城県など平板アクセント地域と接しているということが挙げられる。当然平板アクセント地域との人の出入りが多いので、その影響が浸透することは頷ける。

もう一つの要因は東京語そのものに内蔵されている。高ピッチ（Ｈ）から低ピッチ（Ｌ）に移ることをアクセントの滝といい、最後の高ピッチのモーラを核ということにすると、核（Ｈ）から滝を経て低ピッチ部（Ｌ）に移れば当然ピッチは低下しているが、その後で別のアクセントフレーズが始まる場合、特に情報上prominenceを置く必要がなければ、その低下したピッチ（Ｌ）を新しい「Ｈ」と見なしてアクセントが始まるのである。だからまた第２の滝に遭遇すればピッチは更に低下する。こんなことを繰り返すとついには低音が出せなくなるので、どこかで高ピッチの再設定を行なう必要があるのである。東京人が通常あまり長い文句を続けることがなく、比較的短いぶつ切りのフレーズを間投助詞「ね」「さ」「よ」を挟んで並べていくのは、こんなピッチの再設定のためである。だから東京

人は、長い文句を続けたいと思えば、ピッチの低下をなるべく避けねばならない。そのためにアクセント滝のない平板（◎型）アクセントを好むようになった、と考えられる。

私の母語である鳥取方言、さらに広島方言なども通常最も東京方言に似たアクセント型をもつ方言に分類されている。「箸①」「橋②」「端◎」などを見ていくと、（「雲②」「海苔①」など散発的な例外を除き）たしかに東京方言と一致しているものが多いが、その一致ぶりはアクセント滝を挟んだ両側のモーラ（のＨＬ分布）について成立することであって、核の前の、東京方言ならＨのピッチの筈のモーラがＬか、せいぜい低いＭ（中間ピッチ）になることで東京方言と異なる。従ってこれらの中国方言では全般的に声が低く、アクセント核だけが高ピッチを付与されて卓立する。【尤も、このアクセント現象は東京方言でも起こり得る。特に強い主張「そんなことはないでしょう。」などが、通常の「んなこと」がＨになるのと異なり、「そんなこ…」がすべて低く、「と」だけが高く発音されることがある。】これだと談話中に単語のアクセント核だけがポツポツと適当な間隔で煙突のように目立つプロソディー（感じはイタリア語に近い）になるのである。

さて、東京方言のプロソディーを高原段丘型と名付け、広島／鳥取方言のプロソディーを孤峰煙突型と名付けてその特質を考察してみよう。すると、高原段丘型では、最初高原で出発したピッチが段丘になって段々低下していくから、ピッチの再設定が必要なのに対し、孤峰煙突型ではその必要がないことがわかる。つまり後者では、短いフレーズを「ね」「さ」「よ」を入れて繋ぐ必要がなく、かなり長い一連の文章でも一息で言い切ることができる、というメリットがある。それに全般に声が低いから感情的でなく理性的な物言いをするのに適している。言語生活の道具としてどちらが優れているか言うまでもない。

最後にプロソディーの具える redundancy について考察しておきたい。 redundancy というのは通常「過剰」とか「重複」とか、あまり良くない意味に受け取られる語であるが、言語学では「余裕」という良い意味に解釈すべきである。言語の或るシステムが最低限必要な条件を満たしているだけだと、一旦それが壊れた（機能しなくなった）場合に言語全体が崩壊することがある。そうならないよう、一見余分な特徴が具わっていて、メインの条件が機能しなくなっても必要な機能を代行することが多い。これを redundancy と呼ぶのである。これを上記諸方言のアクセント核に当てはめてみると、東京方言ではアクセント核は単に滝の前の最後のＨモーラでしかないが、広島／鳥取方言では最初にして最後のＨモーラだから、いわば前後から保険／担保されている。この方がアクセントとして安定している筈である。東京語の平板化進行は redundancy の不足にもよるのである。

参考文献

☆Langacker, Ronald W. (1995) 'Raising and Transparency' *Language* vol. 71, No. 1
☆田原　薫 (1999a) 「Langacker (1995) 繰り上げ論批判Ⅰ」『言語文化学会論集』第12号
☆田原　薫 (1999b) 「Langacker (1995) 繰り上げ論批判Ⅱ」『言語文化学会論集』第13号